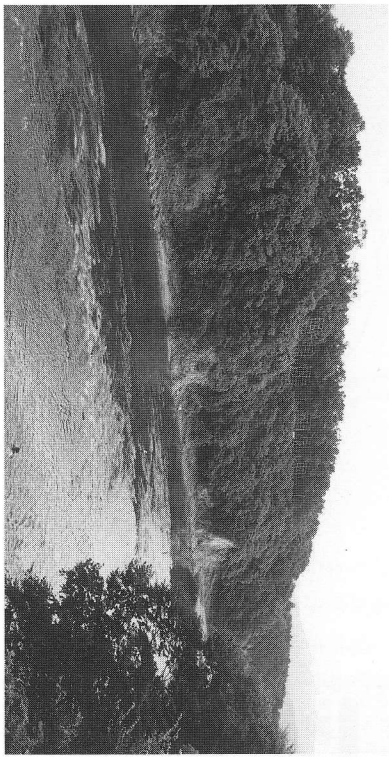


5

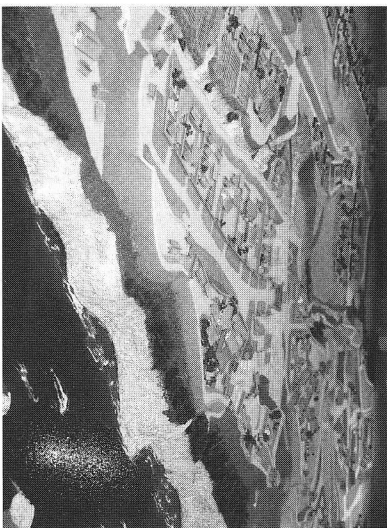
鉢形城 がたじょう



鉢形城の断面

鉢形城の歴史

鉢形城は文明八年（翌）長尾景春が主家・山内上杉氏に叛いてここに拠った時に始まるとされるが、それ以前から利用されていたともいわれ、源経基、畠山重忠らが築城あるいは居城したと伝わる記録もある。その後景春は大田道灌によって追われ、そのあとに山内上杉顕定、顕実が入り、次いで上杉氏の臣・藤田氏の支配するところとなった。北条氏那が藤田氏の養子となり鉢形城に移ってから拡張・補強して、八王子城、澁山城に次ぐ県内では最大規模の城となった。火薬



鉢形城復元模型（鉢形城歴史館）

鉢形城は、別名岡城といわれ、北は荒川を望む断崖、南は崖深い深沢川を内堀とした天然要害の平山城で、縄張りには県内最大規模を誇る名城の一つである。堀北の山間地のため県内主要城址のように市街化されず、一部が田畑や住居や公用地になっているが多くは往時のままに残されている。近年、発掘調査も進み土塁の下も確認され今後の調査が期待される。

藤田氏一族の悲劇 四十八釜伝説と

難波田氏と難波田城公園

天文6年（1537）の松山城攻防戦で、寄せ手の北条方部将・山中主膳が、一度は打って出たものの形勢不利と城内に逃れようと駒を返した難波田弾正に向かい、歌でその理由を問うと、堂々歌が返ってきた。これが世に有名な「松山城風流歌合戦」であり、この二人の風流を解する武将のエピソードは、ともすると戦いに明け暮れ殺伐たる武蔵武士・坂東武士のなかで、ひとときわ精彩をはなつていく話として知られる。とくに、歌の心得があるばかりでなく、名将・智将として北武蔵に台頭し、その勢力を拡大していったといわれるのが、松山城の城代・難波田弾正左衛門正直（善銀）であった。

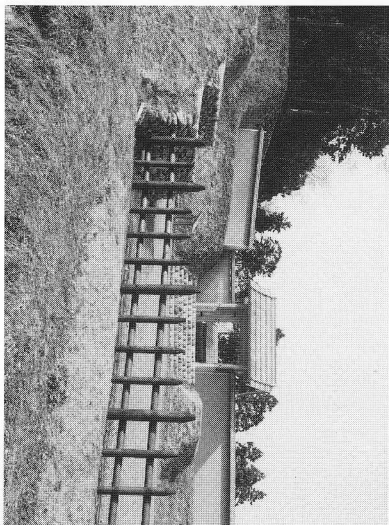
その難波田弾正の本拠地は現在の富士見市一帯であり、その居城跡は発掘調査（昭和62年）の後、近年、18億円の整備事業費を投じ、「難波田城公園」として完成した（平成12年6月）。公園は難波田城資料館をはさんで城跡ゾーンと民家ゾーンに分けられており、曲輪や城門、

- ▶交通＝東武東上線志木駅東口より東武バスターミナル高松行き、興禅寺入口バスター下車徒歩3分。あるいは下南畑行き、終点下車徒歩10分。
- ▶問い合わせ先＝難波田城資料館：0492（53）4664。資料館に展示されている難波田城跡復元模型は見所のひとつ。



木橋、水堀の一部が復元されているほか、市内に残されていた明治時代の民家3軒が移築、さらに納屋や穀蔵が新築され並んでいる。

難波田氏というのは武蔵七党のひとつ村山党の金子氏を祖とする鎌倉武士であり、難波田の地に館を構えその名を名乗ったことに始まる。のちに扇谷上杉氏の重臣となり、松山城の城代をつとめた難波田弾正善銀は天文6年、川越城を奪った勢いで松山城にやって来た小田原北条氏の猛攻を受ける。その後善銀は上杉朝定とともに川越城奪還のため出陣したが、いわゆる川越夜戦（1546）で敗北、朝定とともに戦死してしまう。のちに難波田一族は小田原北条氏の軍門に降り、難波田城も北条氏の支城となるが、秀吉の小田原征伐（1590）の後、城城となった。文禄元年（1592）一族の難波田重利が関東地方に入府した徳川家に召し出され、家臣として仕えた記録が残る。



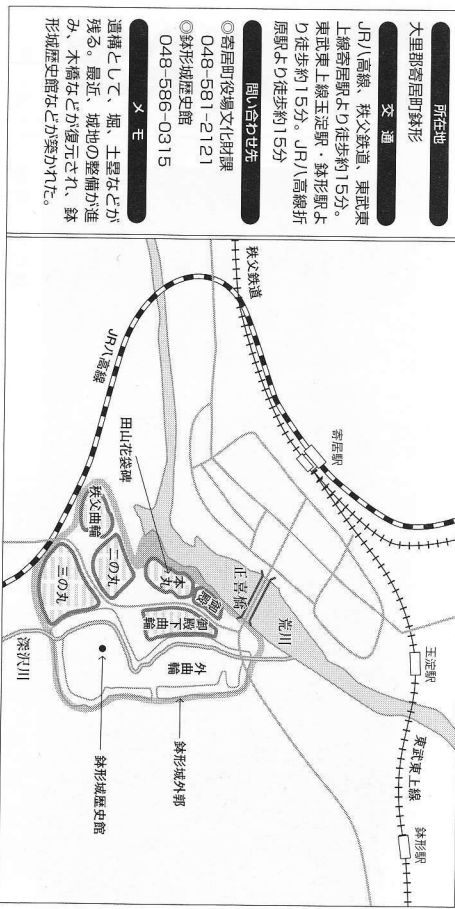
秩父曲輪

その跡を追った。どれほどの道のりを歩いたか、左衛門はいつしか美しい御殿の前には、乙姫様に会って日夜欲しかった。左衛門は、家が懐かしく帰ることになった。お土産に、名刺「水切丸」と「阿弥陀尊」を買っての帰り道、今の「亀の子淵」まで来た。ところが、淵には重い蓋がかさって、押しても引いてもびくともしない。外に出られない。そこで



左は秩父曲輪、右は二の丸

水切丸でこの蓋を力一杯突いたら、蓋は難なく外れ、川は真っ赤な血に染まった。蓋をしていたのは正覚坊という亀であつた。左衛門は、お堂を建て阿弥陀尊を祀り、水切丸を納めた。後にお堂は焼失したが水切丸だけが残り、これを藤田氏那(北条氏康の子)の菩提寺の正覚寺に納めた(また、亀の正覚坊を、手当てをして逃がしたという話もある)。「袴



所在地
大里郡寄居町鉢形

交通
JR/八高線、秩父鉄道、東武東上線寄居駅より徒歩約15分。東武東上線玉蓮駅・鉢形駅より徒歩約15分。JR/八高線折原駅より徒歩約15分

問い合わせ先
●寄居町役場文化財庫
048-581-2121
●鉢形城歴史館
048-586-0315

× 主な遺構として、堀、土塁などが残る。最近、城地の整備が進み、木橋などが復元され、鉢形城歴史館などが築かれた。

「天丸釜」伝説

玉京伝説集成『ほか要約』

昔、北条氏の祈願所の長久院に大丸釜から出たと伝えられる「瑠璃光の珠」があつたという。昭和三十四年(五五)一人の僧がやってきた。この僧は、大里郡某村の出身で長らく他所へ行っていたという。僧の生地に靈験あつたか薬師如来の秘宝とされる「瑠璃光の珠」があつたが、これは鉢形城落城と同時にこの村に渡ってきたということで、真相を知りたく尋ねてきたという。

そのほか、釜が鳴る(森平釜)、釜から異形のもの飛び出す(中下釜)、雨乞いに靈験がある(雨乞釜)、願掛けが叶う(祓戸釜)、山仕事の安全を願う(山神湯釜)、食器を貸してくれる(不動釜)など、この淵の鯉を食うな(不動釜)など、たくさん話が残る。

「姥釜」(四十八釜の一つ) 鉢形城主北条氏那の乳母が身を投じた深い淵を姥釜

四十八釜伝説(民話)

兵器が未発達時代の時代における築城の代表的なものである。小田原を本城とする北条氏の主要な支城の一つとしての鉢形城を中心に北武蔵、秩父、上野南部を支配した。特に甲斐の武田氏に対する備えを強く意識したようで、秩父方面の支城を強化して前田・上杉軍に攻められた氏那は前田利家に降つた。そのとき鉢形城は開城したのか落城したのかわかっていない。徳川氏が江戸入府後に廃城となつた。それから四〇〇年、前述したように今日よくその姿を残し貴重な遺跡として存在する。

鉢形城にまつわる伝説と民話は落城にかかわるものほか特に水にかかわるものが多く、その中でも鉢形城内堀であつた深沢川の「四十八釜」(四十八の淵を称す)に由来するものが圧倒的に多い。それは「四十八釜」の幽玄な景観から、必然的に生まれたものと思われる。



本丸跡

兵部が未発達時代の時代における築城の代表的なものである。小田原を本城とする北条氏の主要な支城の一つとしての鉢形城を中心に北武蔵、秩父、上野南部を支配した。特に甲斐の武田氏に対する備えを強く意識したようで、秩父方面の支城を強化して前田・上杉軍に攻められた氏那は前田利家に降つた。そのとき鉢形城は開城したのか落城したのかわかっていない。徳川氏が江戸入府後に廃城となつた。それから四〇〇年、前述したように今日よくその姿を残し貴重な遺跡として存在する。

鉢形城にまつわる伝説と民話は落城にかかわるものほか特に水にかかわるものが多く、その中でも鉢形城内堀であつた深沢川の「四十八釜」(四十八の淵を称す)に由来するものが圧倒的に多い。それは「四十八釜」の幽玄な景観から、必然的に生まれたものと思われる。

「船釜」(隠れ里伝説) 昔、賽取左衛門

という。「姥釜が鳴るから、今日は雨に

なる」など言われていた。

「腰元の霊」大正（五三三）の初め頃、深沢川の川口に毎年美しい鳥が飛んでくると話題になった。調べたところ、鉢形城落城の時、川に身を投げて死んだ

の後、鳥は来なくなった。

「女沢川」鉢形城落城のとき殿様、奥方、お供のものが荒川付近に身を隠しながら、上流の沢にはいり末野の正龍寺に逃げ込んだ。それから、この沢を「女沢川」というようになった（荒川総合調査報告書 4 荒川・人文3）。

大福御前と氏邦 鉢形城落城時、氏邦の妻大福御前は上杉氏の臣となっていた弟

信吉を頼り会津へ行つたらしく、後に寄居の正龍寺に戻ったのは信吉の配慮によ

るものと言われる。大福御前はまた落城

で天神山城の麓の法善寺に逃げ込んだと

も、家臣の小前田某に守られて末光光福丸と共に山中に逃れたとも言い伝えられ

る。いずれにせよ、加賀前田家へひきと

られ釜沢で過ごすこととなった夫氏邦と

急斜面は深い木立に覆われ、いかにも伝説や民話がまた生きている妖気が感じられる。また「大丸釜」や「腰元の霊」と名乗った。重利の次男信吉も数寄な生

涯をたどったといわれ、氏邦が入婿後沼田城にいた兄重運が氏邦によって善殺さ

れたあと信吉が兄に代わり沼田城の城代

になったが、氏邦に対する不信から武田

氏に走りさらに上杉氏の家臣となり最後

には徳川氏に仕えた。この上杉景勝の臣

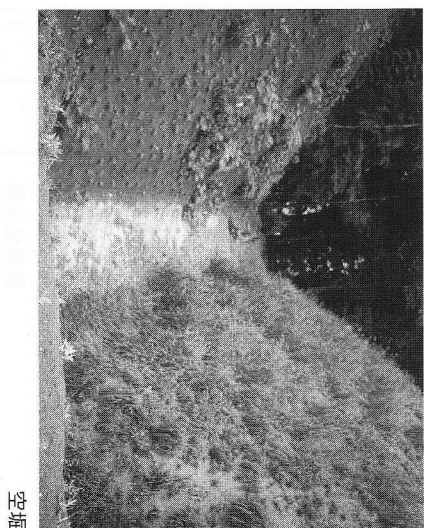
のときか信吉の最も華やかな時であった

送ったといわれるなど、氏邦夫妻に力を

かしている。氏邦に対しては決して好感

を持ってなかつたと思われ信吉の、氏邦

に対する敵身的行為は姉大福御前の愛



空堀

らむ伝説として「軍山から大庭」の請が

ある。鉢形城の南西約二キロにある軍山

は城を見下ろす絶好の場所。寄居の

前田・上杉連合軍の中から徳川家康の家

臣本多忠勝が二千人八人持ちの大

筒を打ち込んで城中を大暴乱に陥れ、

いに落城させたという。

四十八釜に関する伝説は自然の不思議

な現象に対する庶民の驚きから後の世に

生まれた伝説であろう。荒川の急流、深

沢川の深い淵、その二つの流れに挟まれ

て一気に盛り上がった高台の薄暗い森は、

自然を畏れ、敬い、霊に懐いた人々が語

り伝えた魂の追憶である。あるいは、魔

城になつて久しく、遺構には樹木が鬱蒼

と生い茂り、昏なお暗い不気味な雰囲気

の中で「戦い」の舞臺であつた事実と幻

想が交錯し、大木に棲む大蛇や、岩陰に

泣く赤子（稚児鬼）の話が生まれてきた

ともいえる。昭和七（一九三二）年に国の史

蹟指定を受け、曲輪の跡は広々と明るい

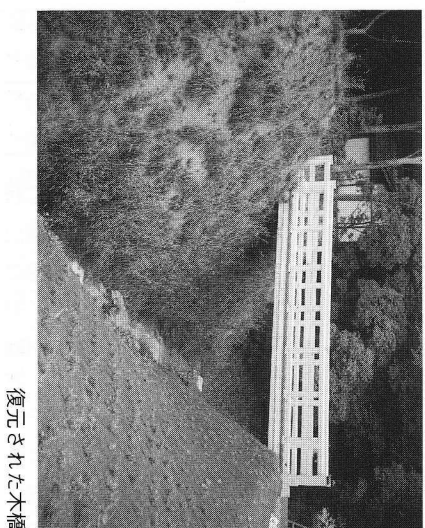
が、遺構内の諏訪神社や稲荷神社の辺り

と、曲輪から荒川や深沢川の河原へ降り

る。大福御前は正龍寺に帰され大福御前と

たあと遺骸は正龍寺に帰され大福御前と

のち自ら刃したという。氏邦も加賀で没し



復元された木橋

情の現れであろうか。

に對する敵身的行為は姉大福御前の愛

情の現れであろうか。

に對する敵身的行為は姉大福御前の愛

情の現れであろうか。

情の現れであろうか。

情の現れであろうか。